

2012/08/14 日提出

理性・原発・イデオロギー

0. はじめに

私たちの周りには、さまざまな原発に関する思想が溢れている。その殆どが反原発であるというのが体感としてある。「かれら」に合理的な理由を尋ねても、口を閉ざしてしまう。「かれら」は取り立てて理由もなく「反原発」なのだ。もはや「反原発」はある種の「イデオロギー」なのではないか、とふと気付いた。そして、所謂「安全神話」というものもまた、このような構造の産物ではないだろうか。だが、原発推進派に目を移すと、彼らは科学を前提として論じ、感情論を嘲笑する。科学というものもまた、一つの仮定であり、「合理性」だけで論を進めることは難しい。どちらも肯定するということは、ある種の価値相対主義に陥る。さて、私達はこのアポリア、隘路をどう克服すべきだろうか。この論文で述べたいと思う。

本論、すなわち「理性・原発・イデオロギー」は以下の流れで進む

- 1 安全神話のつくりかた
- 2 原発反対派のイデオロギー～「フクシマ」歴史的文脈～
原発反対派の歴史的背景
- 3 原発推進派～科学という宗教そしてその合理性の諸問題～
- 4 全体主義の弁証法～価値相対主義・決断主義を超えて～

1. 安全神話のつくりかた

まず、最初に安全神話がどのように作られてきたのか、その歴史的背景を辿りながら説明していこうと思う。

まず、1953年にアイゼンハワーが日本に原子力の平和利用を勧め、中曽根康弘が日本においても原子力発電を推進し始める。この時、①科学技術一般に関して信頼が厚いこと②外国から輸入された技術であったため、外国の安全基準をそのまま採用すれば安全上問題にならないと考えられていた。また、当時原発周辺の住民の居住区の関係で、原発と住宅街の距離的關係の近さから、「安全性」を訴えなければならなかった。

次に原子力損害賠償法について考えたい。この制度は曖昧な規定であり、電力供給業者の原発事故に関して国が賠償援助をするというものだが、これは同時に電力供給者に責任の所在があるということも規定していた。この結果、安全規制に関する責任の所在の曖昧さが生まれた。ここに、「原子カムラ」と呼ばれる構造の源泉が見られる。

そして、1973年には石油ショックとエネルギー不足が原因となりより一層原発の重要性

を再認識させられた。資源エネルギー庁が設立され、電源 3 法が制定される。これにより
立地自治体に原発建設を受け入れるインセンティブが与えられた。*

また、「原子力安全委員会」が設置された。しかし、専門的な知識を有し、原子力の技術
的側面について、全体から判断できる原子力安全委員会は、あくまでも総理への助言機関、
「ダブルチェック」を行う機関として位置づけられたため、事務局も科技庁原子力安全局
が担当するという状況であった。*そして、ガバナンス体制は厳格な検査を実施し、書類に
よる審査を強化する方向へ進み、原発全体の安全性を看過する方向へと向かった――。

2. 原発反対派のイデオロギー～「フクシマ」歴史的文脈～

今現在、反原発の思想の多くは「ユートピア」的性格のものである。また、彼らが称
揚する「脱原発」というのは「日本国」に限定したものであり、一国主義的、ナショナリ
ズム的性格を持っている。しかしながら、脱原発を進めることはすなわち第2次産業のア
ウトソーシング、海外移転などを伴い、旧第三世界の原発推進に繋がる。貧困や援助をし
ておきながら、都合のいい時だけ旧第三世界の諸国に原発を押し付けるのは不義理ではな
いか。

この章ではこの反原発の思想の背景を読み解きつつ、その問題点、長所を考える。

「反原発」はどのような歴史的背景があるのであろうか。以下年表を参考にしながらその
思想の潮流を辿る。

1953

アイゼンハワーが日本に原子力の平和利用を勧める（*¹原子力の平和利用（アトムズ・
フォア・ピース）を訴える。原子力を商品として輸出するという資本主義的国策への転換と
言える。）

そして、中曽根康弘が日本においても原子力発電を推進し始める。その本音としては「原
子力による核武装」というものがあつたと考えられている。

それ以前の一九四七年九月、アメリカ大統領トルーマンが議会で原子力の平和利用に関す
る演説をおこない、日本でも平和利用についての新聞報道が散発的になされるなどがあつ
たと考えられている。*²

ここで、政府に『原子核研究所』の設立を勧告される。しかし、学会の多数は原子力
の平和利用に対しては時期尚早との考えであつた。とりわけ、マルクス主義者で著名な理
論物理学者の武谷三男の影響下にあつた若手学者たちは、政府主導で原子力研究が進めら
れた場合、それが軍事転用される可能性が高いことを指摘して反対した。*³

ちなみに武谷自身は第五福竜丸事件に端を発する反核運動においては科学者として奔
走し、一九七〇年代には反原発運動にもコミットするようになる。しかし、武谷技術論と
呼ばれるその理論は、それ自体では原子力発電はもちろん、核兵器さえも否定するもの
ではなく、実はむしろ、それを推進する論拠をさえ提供するものであつたという。*⁴

武谷らが、一九五〇において、原子力の平和利用という政治の方向性に対して、根本的な

*¹朝日新聞「原発国家」田中角栄編、2011年8月17日

*²日本の原子力政策の課題と展望 北海道大学法学研究科 鈴木一人

*³反原発の思想史 筑摩書房 絳秀実著 p21

*⁴反原発の思想史 筑摩書房 絳秀実著 p20

*⁵反原発の思想史 筑摩書房 絳秀実著 p22

*⁶反原発の思想史 筑摩書房 絳秀実著 p23

批判の論理を持ちえなかったことについては、すでに述べた。それは結果として『研究凍死をもっともっと増大させて、科学研究をはるかに推し進めるなら、問題の全面的な解決がえられる』（広重徹）という札束の誘惑に屈する途をひらいた。『福島』以後にクローズアップされた『原子カムラ』が、そのようなところから形成されたことは言うまでもない。

*

1954

米ビキニ環礁で水爆実験、第5福竜丸被爆

ここで日本の反「核」運動が生まれる。広島・長崎でも起こったのだろうという意見があるが、GHQの管理下の日本では反核運動はできなかったと考えられる。

1954

この時期、旧ソビエト連邦でも原子力発電が始まる。

社会主義のユートピア的思想が日本共産党などを通じて導入される。

そして、間もなく中ソ論争が始まる。ここで、中ソ論争が始まり、毛沢東の第三世界革命思想、すなわち土着に根差した思想を発展させこれが、近代の科学技術批判と結びつき反原発運動の思想の源泉となる

1970

大阪万博にて原発を称揚する岡本太郎の太陽の塔が展示される。

この時期各地で公害運動がおこり、反原発運動の萌芽となる。

1979

スリーマイルアイランドにて原子力事故が起こる。

1986

チェルノブイリ事故発生

1980年代においては、反原発公開ヒアリング阻止闘争や総評主導による労組動員型反原発運動が頻発するようになる。反原発運動が80年代に一度ピークを迎えるのだ。

絳秀実によると、

「運動の質を参加人数だけではかることはできないが、八〇年代後期反原発運動のピークは、『ニューウエーブ』運動のさなか、一九八八年四月東京の『原発止めよう一万人行動』で、予想を倍する二万人が終結した時であった。この人数は、当時の対抗運動全般のなかでも驚異的なものであった。この人数さえ、九月一日までの時点では、『福島』以降の運動はこえられなかった。二〇一一年九月一九日には『原水禁』を中心とした主催者側発表六万人集会があつて、人数だけではようやく『ニューウエーブ』をこえた。しかし、それは社共・労組の組織動員を基礎とした東京中心の大カンパニアであった。『ニューウエーブ』の運動は、単に東京に集約されるものではなく、それ以前の一九八八年一月、二月の二度にわたる伊方原発出力調整実験反対闘争（一回目一五〇〇人、二回目五〇〇〇人）に始まり、一九八九年四月の六ヶ所村核燃料基地反対闘争（一万人）、一九九〇年四月の泊原発燃料搬入阻止闘争（四六〇〇人）等々、という全国展開の『波』が、結果としてもたらしたのであった。^{*6}」という。しかし、その後労働戦線統一の過程で総評は解体され、運動は急に熱が冷めていった。

80年代の反核反原発運動のバックグラウンドは、薄く広くニューエイジ的なものが存

在していたことが特徴的である。そして、そのニューエイジ的な思想は、1968年の全共闘運動に起因する。彼らの毛沢東のエコロジー的な思想がニューエイジ的な思想に繋がったのだ。

1990年～

90年代やゼロ年代の反原発運動を主張していたのは、忌野清志郎、南こうせつ、スタジオジブリ、「宝島」文化など一部の文化人であった。そして、その反原発運動はあまり世間に対して影響力を持ちえないものであった。

2011.3

福島原子力発電所にて、事故発生。
以下今現在の原発運動について分析する。

「反原発思想」の今

上述した反原発の思想の潮流は脈々と現在の反原発思想にも受け継がれているように思われる。反原発運動の著名人として、坂本龍一などが挙げられるが彼らの思想は極めてユートピア的であり、農本主義的思想（＝天皇崇拜的思想）が見え隠れする。最近話題を呼んでいる坂本龍一の「たかが電気」という発言には、その思想の濃さが全面に表れているといえる。

絃はこれに関して「右派の『生命を守れ』というスローガンとリベラル左派の『生命を守れ』というスローガンは、日本の原発だけを問題にしている限り、何の差異もない。この時、ニューエイジ的・ロハス的なエコロジー主義が回帰してくる。日本的『自然』こそ、守るべき『生命』であり、原発を生み出した西欧的近代科学主義をこえる代替知——天皇制——を内包していたとさえ見なされかねないからだ。」と述べる。

また、最近の反原発運動に関して注意しておきたい点がある。つまり、この反原発運動の標榜しているのは「反原発」だけではなく、「反格差・反貧困・反失業・反原発」であるということだ。これは、すなわち反原発運動がその本来の側面とは別に、新自由主義批判の側面をも持っているということを表している。

絃 秀実によれば、「新自由主義批判＝反資本主義の運動は、ヨーロッパやアメリカ合州国で新たな展開を見せており、この問題を繰り返さないことは、日本の反原発運動でも赦されないだろう。」とのことだ。^{*7}

しかし、この運動の主張するナショナリズム的な「日本の原発を無くせ」という主張は

格差・貧困・失業の増大に帰結していくと考えられる。「脱」原発と新自由主義は共犯関係であるからだ。

脱原発を進めることはすなわち第2次産業のアウトソーシング、海外移転などを伴い、旧第三世界の原発推進に繋がる。そして、この運動の標榜する「反格差、反貧困」は自分の満足のいく仕事を要求している。だが、この両方の主張は、ジレンマの関係にある。なぜなら、この運動で仕事を要求している者たちは第三次産業に従事する者たちであるが、彼らは第2次産業に従事する者への配慮は希薄になる。そして、脱原発を進めることはす

*8 反原発の思想史 筑摩書房 絃秀実著 p277

なわち第2次産業のアウトソーシング、海外移転などを伴うことを認識していないために、彼らの職を奪うことにもなる。

このようなナショナリズムの中では、どんなにエコロジカルな循環型社会の主張もナショナリズムの中に回収されていってしまう――。

3. 原発推進派～科学という宗教そしてその合理性の諸問題～

さて、今まで原発批判派についてその思想的潮流、問題点を辿ってきたが、次は原発推進派に目を移す。私が原発反対派の論のみ、その歴史性・虚偽性を暴露し対象化するのであれば、マンハイムの語用の「特殊イデオロギー」に留まるであろう。しかし、それを脱却するために、原発推進派の論も分析しようと思う。

原発推進派の最終的な結論は基本的には「今回の原発は東電の危機管理体制の不備にあるのだからその管理手法、原発の危機管理さえ注意すれば原発は最高の電力供給装置になりえる。」というものである。

だが、「いくら安全に設計、制度整備、あるいは危機管理を行ったとしても、事故はあり得るものではないだろうか。原発という電力供給装置は人間理性が扱える範疇のものであろうか。」というとき科学、合理性を盲目的なまでに信奉している原発推進主義者は答えに窮する。ex 斑目春樹（以下 読売新聞*から抜粋 斑目氏は22日に首相と面談した後も、「(首相に)呼びつけられ、怒られた」と記者団に説明、首相周辺が「首相は怒っていない」と“訂正”して回る一幕も。過去にも、原子力発電所の運転差し止め訴訟の被告側証人として、「どこかで割り切らないと(原発の)設計はできない」と証言したことがあり、22日の同委では「割り切り方が正しくなく、十分反省している」と述べた。)

今、思い返してみれば、福島第一原子力発電所での事故当時、原子力発電所と政府は「決断主義モデル」にあったと思う。ここでいう「決断主義モデル」とは、ハーバーマスが提示する政治的知識と専門的知識の3つの結びつきモデルのうちの一つを指す。このモデルが意味するところは、専門的知識のあまりない政治的实践において、専門的知識があまりないにも関わらず、政治が自身で指示をしてしまうように技術に対して優越しているということだ。

そしてこのように「原発に関して専門的知識があまり持っていない」にもかかわらず、利益のみを求めて原発再稼働を決めてしまうような姿勢には政治的实践において功利主義的な、利益追求的な思想が読み取れる。

このような思想に関して良いものだと我々は言い切れるだろうか。ハーバーマスであれば以下のように主張するであろう。つまり、「今回のような行政の決定と、脱原発デモの例からもわかるように、このような技術操作的行政の政策つまり常に合理性を求める体制は、人間性の疎外をも引き起こしてきた。

*読売ウィークリー2011年3月29日

<http://www.yomiuri.co.jp/politics/news/20110329-OYT1T00793.htm>

このような状況を脱する為に、民衆は自身を啓発して科学技術に関する知識を身につけ、脱政治化している自らの状態を脱却すべきである。」と

(ハーバーマスは、「ふるいイデオロギー」においては、人間は会話や労働といった相互行為に基づく生活体系全体の基盤のもとに生きていたが、「あたらしいイデオロギー」のもとでは科学技術＝目的合理的生が社会システムに組み込まれて、体系化されており、科学技術の体系が人々の絶対的な価値観になっていると主張していた。)

我々は、経済学の想定するような「合理的な人間」などではなく、むしろ決してその「人間性」排除してはいけないような主体である。

私が思うに、科学を盲目的に信奉する原発推進論者が掲げる論の悪質な点は、それがさも自分のみが客観視できているとし、原発反対の者に対してそのイデオロギー性を指摘し、優位に立とうとしている点である。

以上の論から、合理性を常に是とするようなイデオロギーを標榜している原発推進論者の論もまた、認めることのできない主張である。

では、原発推進論者のイデオロギー性を考えたところで次の論に移りたいと思う。

すなわち、原発推進・反対の思想の弁証法についてである。

4.全体主義の弁証法～価値相対主義・決断主義を超えて～

I マンハイムの分析

まず、ここで改めてイデオロギーについての概念を確認しておこう。カール・マンハイムによると*、

『イデオロギー』という概念は、政治上の葛藤から得られた例の発見を反映している。すなわち、支配集団というものは、その思考にさいして、あまりにも利害に縛られた態度で状況に対する傾きがあるため、その支配感覚がそこなうおそれのあるものにたいしては、とかく目をつぶりがちだ、という発見である。

この『イデオロギー』という言葉は、一定の集団の集合的無意識は、一定の状況下では、社会実状を自己および他人の目から隠し、そうすることによって社会の安定をはかるものだ、という意味を暗に含んでいる。

一定の抑圧された集団というものは、精神面において、社会の特定の状態の絶滅や変革にたいして熱烈な関心をいただくものであるため、知らずしらずのうちに、状況を否認する傾向をもった契機にしか目を注がなくなるおそれがある、という発見である

ユートピア的心性においては、願望の入り混じった表象や行為への意志などによって手引きされた集合的無意識が、現実の一定の側面を人々の目から覆い隠すのである。

イデオロギー思想とユートピア思想とに共通するもっとも重要な点は、そこで虚偽意識の可能性が自覚されるところにある。この虚偽意識こそ、イデオロギー思想とユートピア思想のもっとも深い意義である。

以上のマンハイムの定義によると、原発推進派は「イデオロギー的」、反原発派は「ユートピア的」とであるとされる。さて以上を定義した上で次の論を述べたい。

すなわち、以上の論を踏まえた上で我々はどのようにこの「福島原発の危機」を論じればよいのであろうか。どう思想的危機を乗り越えればよいのであろうか。

～価値相対主義・決断主義を超えて～R・ローティ的自文化中心主義による克服

反原発の思想についてその思想の源流を辿っていった桂秀実は、以下のように語る。*⁸

われわれは、どうして—あるいは、どうしたら—「反原発」と言えるのか。今日の運動がリスク論やコスト論の範囲を出ることができず、歴史意識を欠いているように思えたのも、本書を書かした理由である。資本主義批判としての反原発。この視点こそ、今日もっとも必要なものにほかならない。そうでないとすれば、反原発の論調は、せいぜい「安全な」クリーン・エネルギーというベンチャー・ビジネスに回収されていくだけだろう。そして、ベンチャーこそ、本質的に新自由主義的なものであることは、リーマンショックに帰結したこの10年の経験で、誰もがウンザリするほど知っていることではないだろうか。

*⁷イデオロギーとユートピア 中公クラシックス カール・マンハイム著 p142

アッと驚く夢想的な「解決策」や、口当たりのよい方針を提示することが、今日の問題だとは思えない。そんなものは、多分ないだろう。原発問題とは、われわれに「反近代」や「近代の超克」の思想へと向かわせるのかもしれないが、われわれは、あくまで、近代に踏みとどまるべきであり、そうすることしかできないのだ。

しかし、この絳秀実に関してはかなり論としては雑なものであると感じる。「資本主義批判としての反原発」という彼の提唱する視点というのは彼の批判してきた「反原発論者の掲げる農本主義」に包摂されるものなので、結局のところ自己矛盾に陥っているからだ。

ここで私たちは相対主義的な視点に引き戻されていく。

ハーバーマスなら、そのような社会的選択は「コミュニケーション」による議論によって行うべきだと主張する。A・センならば、公共的理性の精査に耐えうるような理屈付けを基にして行われる熟議をすべきだと主張するだろう。

しかし、これに関してR・ローティは以下のように批判する。

「民主的な社会にとって、その自己イメージが普遍主義を、そして何らかの形態の合理主義と啓蒙を具体化していることが不可欠である、とハーバーマスは考えている。彼の考えによれば、「コミュニケーション的理性」について彼が与える説明は、合理主義を最新のものにする方法なのだ。私は、普遍主義であろうと合理主義であろうと、最新のものにしたとは思わない。むしろ両者を解体し、何かその代わりにしてしまいたいのだ。したがって「主観的中心的理性」から「コミュニケーション的理性」へというハーバーマスの転換は、私が強調してきた論点——つまり、リベラルな社会とは、歪み泣きコミュニケーションの帰結に偶然重なったものであれば何であれ、『真である』と呼ぶ社会である、という論点——と同じ論点を作り出すうえでの、誤解をうむ方法の一つにすぎないと思える。この転換が意味するところは結局、人間という主体と知識という客体との間にあらかじめ確立されている調和というイメージを捨て去ることであり、したがって伝統的な認知論的—形而上学的問題を捨て去ることなのである。*

このようにしてローティは理性による解決に痛烈な批判を行い、「理性による連帯」の不可能性を説いた。ローティの「熟議」に対する批判は、討議とは「真」となる解を出すものであるという仮定のもとに行っているものである（実際は絶対的解を出すのではなく最善の解を求める）、若干藁人形の誤謬を犯しているが、その主張する「連帯」の概念、また、「公私」を矛盾を抱えながら生きるアイロニストの概念に啓発されるものがある。

R・ローティは、私的なもの（自らが信じるもの）と公共的なものとを統合することの不可能性を提示し、「アイロニカル」な態度を取っている。このような姿勢は、自らの思想の偶然性を意識することから始まり、自分の信じている知識について、それを物差しにして様々な意見を受け入れることに繋がる。

また、彼は偶然性の海の中での相手への感情移入とその同情による仲間意識を「連帯」と呼び、これを行う「想像力」が大事であるとした。

R・ローティの述べたように、私たちは自分の知識を絶対的であると信じて意見を判断する他ない。しかし、そのような「私的な営み」と相手の意見に耳を傾け、自分の考えを醸

*⁸ 反原発の思想史 筑摩書房 絳秀実著 p130

*リチャード・ローティ 「偶然・アイロニー・連帯」 岩波書店 p139

成していくといった「公的な営み」は必要である。この「アイロニスト」のような実践の考え方が今現在の原発・反原発の思想に欠けているように思われる。

私がここで提案したいのは脱原発の運動を行う者は、官僚に対して「彼ら」という距離を取るのではなくて、「われわれ」という距離で国際的なエネルギー政策のオルタナティブを提案すべきであるということである。今まで、脱原発の運動家が意思決定者である政府に対し、陳情することは多かったが、現実的な提案を出来ていなかった。

逆説的に原発に関して適切に対処できていない政府に関して「連帯」の意識を持つことが重要ではないであろうか。政府の意思決定全てに関して非があるわけではない。

現在、原発再稼働に対するデモを行っている人々はシュプレヒコールを叫ぶだけではなくて、原発に関してその構造に関して学び、政府が採ることのできる、他国の模範となるような「国際的な」エネルギー政策のオルタナティブを提示していくことが肝要であると思われる。

参考・引用文献

朝日新聞「原発国家」田中角栄編、2011年8月17日

日本の原子力政策の課題と展望 北海道大学法学研究科 鈴木一人

反原発の思想史 筑摩書房 桂秀実著

イデオロギーとユートピア 中公クラシックス カール・マンハイム著

リチャード・ローティ 「偶然性・アイロニー・連帯」岩波書店

読売ウィークリー2011年3月29日

<http://www.yomiuri.co.jp/politics/news/20110329-OYT1T00793.htm>